

別記様式（第2条関係）

会 議 結 果 報 告 書

令和6年12月23日

会議の名称	令和6年度第1回志木市総合教育会議
開催日時	令和6年12月23日（月）13時30分～14時20分
開催場所	志木市役所 教育委員会会議室（中会議室2-1,2-2）
出席委員	志木市長 香川 武文（進行者） 志木市教育委員会教育長 柚木 博 志木市教育委員会教育長職務代理者 岩澤 千恵子 志木市教育委員会委員 上野 幸子 志木市教育委員会委員 飯田 昌利 志木市教育委員会委員 可知 良之 (計 6人)
欠席委員	なし (計 0人)
説明員職氏名	佐野教育政策部参事兼学校教育課長 (計 1人)
議 題	志木市の多様な学びの支援（不登校支援）について
結 果	議題に沿って、意見交換を行った。
事務局職員	松永市長公室長、今野教育政策部長、佐野教育政策部参事兼学校教育課長、成田教育政策部参事兼教育総務課長、坂口教育サポートセンター所長、松田政策推進課長、青木学校教育課指導主事、植島学校教育課指導主事、浦野教育総務課主査、矢野政策推進課主任、荒巻政策推進課主任、石田教育総務課主事
その他必要事項	

会議内容の記録（会議経過、結論等）

開会前に傍聴希望者の有無について確認を行った。

→傍聴希望者あり（２名）

1 開会

（傍聴希望者入室）

2 議題

志木市の多様な学びの支援（不登校支援）について

佐野教育政策部参事兼学校教育課長より、志木市の不登校対策について説明した後、意見交換を行った。

（市長）

本市の現状として、不登校者数が増加している現状であるが、どのように捉えているか。

（委員）

小学生の不登校者数が増えているのは、今までになかった傾向であり、今までと異なる次元に入ってきていると思う。

また、コロナ禍の２年間において、黙食等の実施などによる様々な形で我慢する生活だったことは、児童への影響もあったと思う。

（市長）

小学校６年生から中学校１年生に進学する際の不登校者数の伸び率が高いが、事務局としてどのような分析をしているのか。

（事務局）

小学校６年生から中学校１年生に進学する際の不登校者数の伸び率に関しては、コロナ禍以前と大きく変わっておらず、学校現場全体で考えていかなければならないと考えている。

中学校への進学にあたり、小学校と中学校の文化の違い等について、取り残されてしまう児童もいるのではないかと分析している。

(市長)

具体的にどのような対策をしているのか。

(事務局)

小中一貫教育をスタートさせるが、小学校教諭、中学校教諭が同じベクトルで児童一人ひとりの9年間を見守っていく取組を推進していきたいと考えている。

(市長)

現場の先生方も様々な対応に追われるなかで、教育委員会としては、この不登校対策についてどのような考えを持っているか。

(委員)

学校が楽しくないと思う原因として、子どもを取り巻く環境の多様化が挙げられる。子どもが楽しいと思うことが変化しており、教員一人で対応するには限界がある。

また、スマートフォンに関するトラブルも増えてきているように感じる。子どもを取り巻く環境が変わっている中で、小学校と中学校の密な連携が重要であるとする。

(市長)

小中一貫教育により、小学校と中学校の密な連携についての効果は期待できるか。

(委員)

児童生徒を取り巻く環境は多様化しており、一つの教室ではなく、児童生徒が学びたいと思ったときに学べる場所の確保は必要であると考えている。

志木第四小学校の校舎を活用することで、このような居場所を確保することができるのではないかと期待している。

(市長)

志木第四小学校は廃校ではなく、活用していきたいと考えている。昨年の総合教育会議において、志木第四小学校の一部を貸し出し、民間のフリースクールを誘致する意見があったが、ブラッシュアップする取組はないか。

(委員)

かつては小学校と中学校で取組の違いがあり、それがギャップとなっていたが、小中一貫教育により、このギャップを解消していけるのではないかと期待している。

また、居場所については、小中高校生の年代の子どもたちが集まれる場所が求められているのではないか。その居場所として志木第四小学校は魅力的であると思う。

(市長)

志木第四小学校は有効に活用したいと考えている。学校に行けなくても社会とのつながりを持つことができる居場所について、教育委員会でリーダーシップを発揮し、検討を進めてほしい。

また、不登校を予防するためには、教員の質の向上が必要と考える。信頼される学校となるためには、どのような取組をすればよいと考えるか。

(委員)

教員の発する言葉の選び方が重要だと考えている。何気ない話が児童生徒にとっては、針のように心に刺さることがある。声掛けの研修の実施や、言葉の使い方について学んでいく必要がある。

(委員)

学校現場としては経験の浅い教員が増えているなかで、個別対応の研修を充実していきたい。また、教員が児童生徒一人一人と向き合う時間の確保も必要である。

(委員)

不登校の児童生徒の中でも、教室には入ることはできないが、保健室になら行くことができるといったように児童生徒ごとの特性も多様化している。

(市長)

宗岡中学校では校内支援ルームの取組を実施しているがどのように捉えているか。

(委員)

非常に良い取組だと考えている。人間関係が苦手で、教室が怖いと感じる児童生徒もおり、自分のスペースが確保されることで登校可能となる。

(委員)

大人がルールを決めるのではなく、どんな児童生徒でも自由に出入りできる居場所を作ることがよいのではないか。

(市長)

経験の浅い教員が増えているとの話があったが、教員づくり、学校づくりにどのように向き合っていくか。

(事務局)

魅力ある学校づくりを目指している。現場の教職員から校長までが一丸となり、学校経営の一員として参画意識を持ち、多角的な視点で学校を作っていく。

(市長)

不登校者数の増加の原因や対策、居場所づくりについて議論を進める中で、地域資源の活用などの提案があったが、教育委員会としてはどのような考えか。

(教育長)

児童生徒が学べる場、遊べる場が多様化しており、学校へ行かなければならないというような価値観も多様化している。自分の居場所は自分で見つけるという前提はあるが、発達段階にある児童生徒にとっては、居場所の選択肢を市が用意する必要がある。

また、学校と児童生徒及び保護者との信頼関係構築のためには、学校の様々な情報をオープンにしていく必要がある。オープンにすることで、学校の心理的安全性を高めるとともに、教員と児童生徒が相互に学びあうことのできる環境を整備していきたいと考えている。教育委員会として、委員各位からいただいた意見を参考にしながら取り組んでいきたい。

(市長)

教育長と同様、「誰一人取り残さない」という視点で、児童生徒の多様な学びの居場所づくりに挑戦していきたいと考えている。

(教育長)

不登校対策についての議論ではあったが、同時に、学校教育全般に汎用性のある施策であり、不登校でない児童生徒にとっても大変意義がある取組だと考えている。引き続きご協力をお願いしたい。

3 閉会